

## 長崎の豪商「雪屋」の話

眞野 正行

はじめに

現在、中島川沿いの浜町一番地に佐賀銀行長崎支店が建っている場所に森家「雪屋」があった。西浜町の森家は元禄年間（一七〇〇年頃）より初代森喜左衛門将義が貿易商「雪屋」として西浜町に住居を構えた時代から昭和四十六年（一九七二）の十一代森喜弘がこの地から移転するまでの約二七〇年間、ここで雪屋は続いていた。同家に伝わる由緒書によると、遠祖は源氏の流れで、室町時代に豊前小倉の城主であったという。その子孫の森喜惣太衛門慰正睦は豊後の豪族大友氏に任えていたが、大友氏滅ぶに及び地を離れ、肥前国西彼杵郡雪浦の郷土となったという。その子孫の初代森喜左衛門将義は元禄年間（一七〇〇年頃）、長崎に出て貿易商「雪屋」として西浜町に住居を構え、当初は貿易を営んでいたが二代から六代に至るまでいろいろと商売を広げて行つた。

雪屋の屋号は、塩を雪之浦から持ってきて商つたことによる。西浜町の裏庭に建ち並んだ三つの蔵を、塩蔵と呼ばれたのはその名残であるという。幕末明治の頃には荒物問屋を営み繁盛し、長崎の地役人や近隣の諸藩の藩士と婚姻関係を結んでいる。ここ長崎の地では土農工商という厳しい差別は緩やかだったのである。

### 森家の家系図

初代・森喜左衛門将義(享保一十九年没)——二代・喜惣次義武——三代・伝兵衛義治——四代・喜三郎義直——五代・定平治直経——六代・伝兵衛元直(安政二年没)——七代・喜左衛門直行(三男)(明治十二年没)——八代・栄之直教(明治一八年没)——九代・喜智郎義之(昭和七年没)——十代・喜智男(昭和四〇年没)——十一代・喜弘(昭和五八年没)



明治33年10月7日  
西浜町傘鉾「前日のたれ」

長崎くんちと「雪屋」  
西濱町の傘鉾は、制作月日は詳かでないが、文化文政の頃（一八〇四）ではないかと言われている。元は町内の乙名今村某氏の手持であったが、安政二年（一八五五）九月十三日の「くんち」の時から森家（八代森栄之）に移り、雪屋森家の一手持ちとなり、以来凝りに凝つた長崎を代表する名傘鉾として有

次男泰次郎、三男此三郎夭折す。四男浩四郎、五男殿五郎、六男純六郎、長女千年、次女万歳、三女曾恵、四女也佐、五女五十年は夭折す。不肖男喜智郎謹んで誌す

明治二年（一八六九）六月二〇日、長崎府は長崎県となる。五月十七日に各藩主は藩籍奉還し、島原・平戸・大村・福江・厳原等に藩知事が置かれ、知事に任命されたのはみな旧藩主であった。

明治四年七月十四日廃藩置県、同年十一月十四日、旧藩の島原、平戸、大村、福江、厳原の各県は廃止、長崎県をおく。同九年八月二十二日、長崎県は三藩県（みづま）の一部（佐賀県全域）と合併して新たな長崎県となる。

明治十二年一月初めての長崎区（長崎市）選出議員は三人で、松田源五郎、斉藤三郎吉、森寛平。森は病気で、すぐに退職し、翌明治十三年三月補欠で当選した森栄之が区会議員になった。そして、この三人の区会議員が当時の長崎を代表する「顔」となった。やがて明治十六年五月九日、佐賀県が分離独立し、長崎県は長崎区（長崎市）、その他の郡すなわち、一区二〇郡となりようやく現状の県域が定まった。

森栄之は明治十八年十一月に区会議員を五年つとめている。森栄之の妻はオランダ通詞猪俣九十郎の三女たか子である。彼女は薬種目利中島家に養子にいった実兄中島藤十郎家の養女として、栄之のもとに嫁している。たか子は昭和三年、八十四歳のとき、今上登極大典天杯を拝受している。そして九十七歳で死去した。

### 森栄之の子孫たち

栄之の長男は元治元年に生まれた喜智郎であり、森氏九代を受けついでいる。喜智郎義之の墓石にも「墓碑銘」がある。その一部を和文に直すと碑文の趣旨は概略左記の如くである。

「森喜智郎義之は幼名喜智之助、素堂と号し又は六花散人と称す。長崎市商工会議所四代会頭。長崎税務監督局営業税審査委員、長崎港湾委員、長崎市所得税調査委員等公職を歴任した。家業の雪屋をつぐ。温厚篤実学殖あり、公共の為に尽力せる所多し」

喜智郎は六男五女に恵まれ、男子は明治初期でありながら次男以降は東京の最高学府まで進ませたが、女子は四女「也佐」を除いて裁縫専門学校までしか認めなかった。そのうち一男一女を夭折したものの、五男四女を育てあげた。そして四男だけは他家に養子に出した。森栄之の実母（内田家）の頼みで旧長崎町年寄薬師寺家の家人眞野家との約束があったのであろう。森栄之の妻は五男四女を残し、その孫は五十五人、ひ孫七十三人もの数にのぼる。その数の多さは産めよ増やせよの明治の時代であったからであろう。現在森栄之のひ孫たちの平均年齢は五五歳〜八五歳となったのである。私も其のひ孫の一人である。（長崎史談会幹事）

名であった。傘鉾の下にさげる幕を「たれ」または「さがり」というが「前日のたれ」には薄水色羅紗の布地に中国蘇州の名勝姑蘇十八景図を荒木千洲が写し、その図を長崎刺繍によつて刺繍し、又其の図に書かれている画讃の文字も刺繍によつて浮かび上がらせているという手のこんだ作品である。

傘鉾を入れる箱書には文久二年（一八六二）とある。これは文久二年（一八六二）西浜町が踊町の時、八代森栄之が作ったものである。「後日のたれ」は、桜花地紋の塩瀬羽二重に、諏訪三社の金紋を織出したもので、之は明治三十三年（一九〇〇年）、町内一般の希望により九代森喜智郎が作ったものである。

今回使用した傘鉾の写真は森喜智郎の弟で眞野家に養子にいった浩四郎が保管していたもので明治三十三年一〇月七日に写したものであろうと考えている。現在、この雪屋の傘鉾は西濱町自治会に寄贈されている。

### 八代森栄之直教の「墓碑銘」

森家の墓域は小島正覚寺（浄土真宗）の後山にあり、其の中に森栄之の墓碑はある。栄之の墓石の「墓碑銘」は漢文二五〇文字からなっている。それを和文に直すと碑文の趣旨は左記のようになる。

「亡父は実名を直教、幼名を卯之助といい後に駒平治又栄之助に改め栄之と称し、素芳と号す。祖先は森喜左衛門であり、（栄之）君は直行（七代）の長男なり。亡母は内田氏（實）である。その人柄はおだやかで気品があり、衆皆ほめたたえる所となる。若きより奮起して家を興す志あり。およそ仕事熱心で思慮深く、礼儀正しくささいな事もなおざりにしない。平常は無駄使いせず勤勉で、とても一時の楽しみと無駄使いを戒めよく祖父の仕事を手助け家名を奮いおこす。その功績はいながらにして多し。余暇には文墨をもつて自ら楽しみ好んで和歌を詠み又南画をよくする。かつて長崎県会議員又区会議員に挙げられる。ついで長崎県勸業諮問会員、長崎区商工会幹事、長崎市商工会議所員、農商務統計調査員を歴任す。又日本赤十字正社員となる。天保九年九月三日生まれ、明治二十八年十一月九日没す。享年五十八才、小島郷の墓地に葬る。妻は中島氏（猪俣九十郎次女で中島氏養女）であり六男五女あり。長男喜智郎は家を継ぐ。

### 風信

〇十二月と言えば、子供達は先ずクリスマスと言い、年金ぐらしの小母おばさんは金足りませんと言う。誰れも「忠臣蔵」の話や、武林唯七の「年の瀬や あした待たるる 宝舟」の話をする人はありませんでした。下の八百屋の小父さんは「十二月と言えば餅つき、それに三十一日夜の『運氣そば』だね」と言つて下さいました。

〇戦後の長崎史談会では幹事の川崎道利さんのご指導で『光源寺』で除夜の鐘をつき、一ぱい飲んで、伊勢・松ノ森・諏訪三社の初参りが恒例になっていますよ」と言われた。

〇長崎では玉園町の唐寺・聖福寺の鐘（長崎市文化財）の音は、物語もあり、有名ですね。友人が言う「この鐘の音は、この寺を訪れた坂本龍馬も、きいたでありますよ」

〇その昔、出島のオランダ屋敷のカピタン部屋では冬至の後十二日にオランダ正月という祝い日があり、出島関係の諸役人が招待されている。この夜は出島では大変なご馳走で、その接待役には丸山遊女も招かれ、其の宴会は夜あけまで続いていた。其の時の献立表は長崎名勝図絵にも詳しく記載してある。そして、それは全て洋食であり、洋菜があり、二次会に至ると日本食も用意したとオランダ商館の日記に記載してある。

〇ところで今年の冬至は十二月二十三日ですね。するとオランダ正月は二月三日になります。ところで来年は、新築復原された出島のカピタン部屋で坂本龍馬殿をご招待申し上げ、賑やかにオランダ正月を開催して下さいませでしょうか。〇このオランダ人のオランダ正月の開催について「実はこの宴会はオランダ人のクリスマスのお祝であった」と先輩方が私に教えられたことがある。「それは第一に料理をみたらわかるよ」と言われる。「大皿の上に置かれた豚の丸焼はリングを銜えさせられているし、宴席の次室で奏でられている洋楽は賛美歌なんだよ」と言われた。

〇言われてみると、当時の我が国ではキリスト教は禁教であり、オランダ船の長崎入港の際は「宗教用具の類一切は箱に納めて入港の事」ときめられていたが、オランダ正月の宴席で賛美歌の演奏があつていると、オランダ通詞は知つていたでしょうか…

〇先輩の記録に、「十二月二十八日、娘の嫁入り先より寒鯛を贈らる。縁起もの幸木につるす」とありました。〇さて本年の最後に、皆様どうぞ良き新年をお迎え下さいませ。（編集・越中哲也 丹田智子）

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一―一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 2F

